

## 分析展 2011/科学機器展 2011 合同展見聞録

9月7日(水)から9月9日(金)にかけて、千葉県の幕張メッセにて分析展 2011/科学機器展 2011 が行われた。筆者らは、その中日である9月8日(木)にこの展示会を取材した。今年は、昨年に続いて分析展と科学機器展の合同展であるため、昨年と同様に大規模な展示会になると予想される一方で、東日本大震災や福島原子力発電所の事故等の影響も懸念された。

会場入り口で受付を済ませた後、展示会場の脇にある合同展の事務局本部を訪ねた。合同展委員会委員長である田中隆司氏、技術委員会委員長である小森亨一氏、事務局長の濱崎勇二氏のお三方から、今年の合同展の特徴や震災の影響等について伺った。

今年の合同展のキャッチフレーズは“産業復興のマザーツール展”とのこと。東日本大震災やその後の円高の影響など、国内の産業界にとっては逆風の強い昨今であるが、この展示会を通して産業の復興や元気づけに貢献したいという合同展主催者の意気込みが感じられた。実は、東日本大震災を受けて、一時は合同展としての開催さえも危ぶまれたそうである。しかしながら、このような時だからこそ、節電の配慮をしつつ、研究や産業の基盤となる分析機器、科学機器の最新情報を皆さんに知っていただく必要があるとの判断で、予定どおりの開催を決意されたとのことであった。今年の出展は1284小間、404社・機関で行われていた。出展者受け付けの締め切りが東日本大震災の直後だったため、昨年に比べると出展者は若干減少(数%)し、特に外国からの出展者が大幅に減少していた。また、事前登録者の数も昨年と比べると若干減っていたとのことだが、事務局の取材前に会場を通った時には、会場の活気は昨年と同様であるように感じられた。

本合同展の特徴として、米国のPittcon展、欧州のAnalytica展と並ぶ世界の3大分析・計測関連総合展を目指し、分析機器・技術に加えて理化学機器、その関連技術が一堂に会した“分析・計測の入口から出口まで”を網羅した形態をとっていることが挙げられる。このため、分析に必要な器具から結果の解釈にかかわるソフトウェアまで、この展示会に来ればすべての情報が得られるようになっていく。事務局としては、会場の隅は来場者の目につきにくいことから、周辺機器や実験器具などを扱う小さなブースを、来場者が行きかう会場の中心にできるだけ配置するという配慮を行っていた。また、節電への協力としては、各出展者にエコロジーな出展をお願いする一方で、事務局としては会場の照明やクーラーを例年の75%しか稼働しないことで節電していた。取材した日の外気温は30℃を超えていたものの、昨年よりは外気温が低かったせい(昨年は猛暑で35℃近くあった)、来場者からは思ったほど暑くないと好評だった。これら各展示企業と事務局の尽力により、昨年に比べて合同展全体としては電気使用量を約40%削減できたとのことである。

今年の合同展のもう一つの特徴として、昨年まで行っていた東京コンファレンスを発展的に解消し、JAIMAコンファレンスに統合したことが挙げられる。JAIMAコンファレンスは合同展開催の前日である9月6日から開催されていた(写真1)。分析化学に関連する学協会など広範な団体に参加してもらい、それぞれの団体が社会的に重要なテーマ、専門性の高いテーマ、技術普及

につながるテーマを取り上げて開催していた(今年は21団体による41件のセミナー、シンポジウム、国際シンポジウム、講習会、ポスター等の実施)。

また、これまで東京コンファレンスで実施されていた米国及び韓国との合同セミナーは、JAIMAコンファレンスと統合する際に、更なる国際化を目的に“インターナショナルコンファレンス”へと進化した。このインターナショナルコンファレンスでは、米国及び韓国との合同セミナーに加えて、世界的に著名な研究者による特別講演(日英同時通訳付き)も開催していた。

最新の技術紹介としては例年どおり、隣接するホテル(アパホテル&リゾートおよびホテルニューオータニ幕張)において各社が新技術説明会を行っており、今年は83社313テーマの発表があった。この新技術説明会については、昨年の302テーマよりも若干増加しており、各社の積極的な取り組みを感じた。全体的な傾向としては、新技術を紹介する内容よりもノウハウを重視する発表が多くなってきており、発表全体の80%以上において内容に占めるノウハウの割合が50%以上であった。この傾向は聴講者側の要望が反映されてきたものだが、事務局としては各企業の新技術を紹介する場が縮小してしまうことを少し懸念していた。

東京コンファレンスで好評だった初心者向け講習会は、JAIMAコンファレンスに統合されても引き続き行われていた。実際、“これであなたも専門家〇〇編”という初心者向けの講習会が4件、それ以外にも初心者向けを意識したタイトルの講習会が多くあった。昨今では分析機器の自動化が顕著であるため、原理や基礎を学ばなくても数値が得られてしまうという現状がある。その一方で、基礎や原理を学びたいと思ってもそのような場がない、ということもよく耳にする。このような初心者向け講習会に参加することで、その場で全てを理解することはできなくても、理解の手助けになれば分析関係業界全体の底上げが期待できると考えられた。

また、一般向けのサイエンスセミナーでは、“科学的な話題を一般の方々にも判りやすく”を合言葉に、「宇宙(そら)からのシグナル深海(うみ)からのメッセージ~オーロラと海底探索~」というタイトルの下、“オーロラの神秘と南極観測隊”と“海からのぞく地球の姿”



写真1 JAIMA コンファレンス入り口



写真2 展示会場の風景



写真3 ミニオープンフォーラムの様子

の2講演が、美しい映像とともに行われていた。このサイエンスセミナーは取材前日(9/7)に終了していたため取材はできなかったが、非常に盛況に終わったようである。

来場者としては、既に一日では回りきれないほど大規模であると感じたものの、主催者としては出展者や来場者にとってさらに有用な展示会とすべく、“展示会”、“最新の技術紹介”、“初心者向け講習会”で構成される三要素を更に充実させ、名実ともに他の2大展示会と肩を並べられるような展示会にするための課題を一つ一つクリアしていきたいと仰っていた。

本部事務局で1時間ほどお話を伺った後、展示会場の取材に移った。

展示会場としては、5ホールから8ホールまでの4ホール分を用いていた。合同展が始まった昨年の5ホール分比べると小さくなったものの、すべてのブースを取材で見て回るには時間がかかり過ぎるため、会場をまわった全体的な印象や目に付いたブースの印象を中心に報告する。

先程事務局で伺ったとおり、四つで一組の展示会場の天井照明はそれぞれ三つしか点灯していなかった(どのくらいの来場者が気付いたであろうか、写真2)。しかしながら、会場自体は各ブースの照明が明るかったため(今年は多くのブースがLED照明を利用していたようである)、例年と比べて暗い感じはしなかった。また、会場内の空調も非常に涼しいとまではいかなかったが、不快に感じるほどでもなかった。

展示会場では、昨年まではほとんど見なかった免震・地震対策用具のブースや放射線計測の機器が目につき、立ち寄っている来場者も多かった。これは震災や福島原子力発電所の事故の影響を受けた直後に開催された今年の合同展の特徴だと感じた。その一方で、節電や省電力を謳った装置等の企業ブースがあまりなかったのは、筆者らにとって少し意外であった。

展示会場の奥では、昨年からは始まったミニオープンフォーラムが開催されていた。取材時には“公益財団法人 日本科学技術振興財団(科学技術館)主催による環境実験「水の循環」”が行われていた(写真3)。このミニオープンフォーラムは会期を通して行われており、これ以外にも科学機器メーカーの主催による“やさしい科学機器入門”や公益社団法人 日本化学会主催による“日本化学会フォーラム理科教育セミナー”が行われており、こちらのミニオープンフォーラムも初心者向けを意識した内容となっていた。

企業ブースでは、何社かがブース内でミスト状の水を扇風機で拡散したり、ブース内の中心に大きな氷柱を展示したりしていた(写真4)。大きな氷柱は視覚的にエ



写真4 ブース内に展示された氷柱

コロジーを訴えるだけでなく、近づくると実際に涼しいため、ブース来場者にも好評のようだった。各ブースが節電に努めながらも、合同展全体としてのキャッチフレーズである“産業復興のマザーツール展”を意識していたためか、昨年同様に活気のある展示会に感じた。

事務局や各展示企業の尽力により節約できた経費については、被災地の教育委員会を通して“青少年理化学教育支援金”に充てるとのことであった。この支援金が被災地の子供たちの勉強に役立ち、その子たちが成長してこの合同展に来場する頃には、東日本大震災の復興や原発事故の収束が少しでも進展していることを願うばかりである。また、その頃にはこの合同展が更に大きくなり、展示企業と来場者の双方にとって更に有用な展示会となることを期待したい。

最後に、取材にあたって貴重な時間を割いていただいた日本分析機器工業会および日本科学機器団体連合会の諸氏ならびに事務局の皆様、この場を借りて御礼申し上げます。

〔産業技術総合研究所 伊藤信靖〕  
〔第一三共株式会社 合田竜弥〕